ISSN 0385-9487

東洋學論叢

菩提遊摩の『楞伽經疏』について（下）　伊吹　敦（1）

中世北インド民衆思想とカビール　橋本　泰元（92）

Rāgavibodha の観想図像とラーガの継承　清水　乞（136）

第三格の意味と用法
—Siddhāntakaumudi, Kārakaprakaraṇa 訳註（5）　萱沼　晃（160）

東洋大学文学部紀要第52集

印度哲学科篇

XXIV

研究室報告

① 本年度の本学役職としては、田村晃祐教授が引き続き大学院委員長、ならびに評議員・理事を担当された。

② 本学の社会的な地位の向上を目指し、平成十年四月一日をもって仏教思想学会の事務局を東洋大学印度哲学科で引き受けることになった。また、平成十年十二月四日には、印度学・仏教学の分野で大学院の単位互換を行っている四大学の学長による親睦会をスカイホールにおいて開催した。

③ 本年度、森章司教授はサヴァティカルに採用されたため、演習を除く担当授業を非常勤の先生方にお願いした。

④ 本年度より新入生歓迎行事を充実させることとなり、本学科でもティーパーティーなどを企画した。また、平成十年四月二十六日には、ゼミ連絡会議の活躍により、例年通り、新入生歓迎球技大会を盛大に催すことができた。多くの参加者を得て、新入生同士、あるいは新入生と上級生の交流を促すという点で、大きな効果を上げた。

⑤ 本年度は、ゼミ活性化対策として三氏をお招きして講演会を開催した。先ず、平成十年七月九日には筑波研究学園講師の飯塚勝重氏による「チベット探検家・河口慧海と能海寛―チベット入境100年記念」と題する講演が、また、同月十六日にはスリランカのコロンボ大学教授、クスマ・カルナーラトナ女史による「スリランカのシンハラ社会における仏教の影響と近現代社会における変容」と題する講演が行われた。いずれも好評であったが、特に飯塚氏の講演は本学の伝統と建学の精神に直結するものであっただけに反響が大きく、急遽、朝霞校舎において全学に公開する形で、再度、行われることとなった。更に、十月八日には東京大学教授の江島恵教氏をお招きして、理事長を勤める日本印度学仏教学会で推進中の事業に関連して「大正大蔵経のデータベース化その意義と現状」と題する講演会を行った。本学科の授業では珍しく、PC教室で最新の機材を用いて行われたため、学生に新鮮な印象を与えたようであった。

⑥ 高橋康行氏の退任に伴ない、春原高信氏が事務助手に就任した。また、本年度の朝霞校舎でのティーチング・アシスタントは、大学院後期課程の松田敦之君が担当した。

⑦ 文学部サーバーの設置に伴い、印度哲学科においてもホームページを開設した。

⑧ 本年度の卒業論文・卒業制作の提出者は、Ⅰ部が六十五名、Ⅱ部が四十名であった。本年度の優秀論文に対する褒賞は、以下の通りである。田村芳朗奨学基金受賞者―石場恵子（Ⅰ部）、美代子（Ⅰ部）。勧学奨学基金受賞者―石場恵子（Ⅰ部）、越田宏子（Ⅱ部）。校友会学生研究奨励基金受賞者―北村真紀（Ⅰ部）、安藤百合加（Ⅱ部）、鈴木洋州（大学院）。印度哲学科賞―植村豪（Ⅰ部）・岡本大二郎（Ⅰ部）。

平成十年度業績（平成十年一月～十二月）

菅沼　晃

〈論文〉

「第二格の意味と用法③—Siddhāntakaumudī Kārakaprakarana 訳注（4）」（単著、「東洋学論叢」第二三号〈「東洋大学文学部紀要」第五一集（印度哲学科篇）〉、平成十年三月三十日、A5判、一一四～一四六頁）

「ブッダの悟りとは—ブッダ成道のドラマ」（単著、『ブッダ・大いなる旅路1　輪廻する大地』平成十年六月二十五日、NHK出版、A5判、一四三～一四八頁）

「ダライラマと転生」（単著、『輪廻転生』平成十年十一月二日、大法輪閣、A5判、一六四～一七九頁）

「空とは何か—空観と救いの関係」（単著、『ブッダ・大いなる旅路3　救いの思想・大乗仏教』平成十年十一月二十五日、NHK出版、A5判、四九～五五頁）

〈新聞連載〉

「法顕」「武帝」「慧遠」「慧可」「百丈」「如浄」「不空」「ミラレパ」「アティーシャ」「ペメジュンネ」「ツォンカパ」「パスパ」「ダライラマⅢ」「ザナバザル」（単著、産経新聞夕刊「who's who 素顔の評伝」、平成十年一月～七月）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会理事／日本宗教学会評議員／日本仏教学会／禅学研究会／日本近代仏教史研究会

学界における研究発表

「共生の原理としての非暴力」（日本仏教学会平成十年度学術大会、平成十年十月三日、高野山大学）

〈調査活動〉

「仏教を中心とした〈共生〉の原理の総合的研究」（平成十年度文部省科学研究費による研究、研究代表者）

「仏教の生命倫理」（平成十年度文部省科学研究費による研究、研究分担者〈研究代表者：国際仏教大学院大学、今西順吉〉）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部：インド宗教史（朝霞、Ⅰ部／白山、Ⅱ部）

インド古典講読①（朝霞、Ⅰ部）

インド哲学演習（白山、乗入れ〈Ⅰ部④、Ⅱ部②〉）

大学院：印度哲学演習Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅰ（前期）

印度哲学特殊研究Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅰ（後期）

〈社会活動〉

学術審議会専門委員／大法輪石原育英会理事

講座「仏教の中のインドの神々」（朝日カルチャーセンター横浜、平成十年五月～七月）

講座「仏教の中のインドの女神たち」（朝日カルチャーセンター横浜、平成十年十月）
講座「日曜講座・インドの哲学と宗教入門」（平成十年一月～十二月、東洋大学）
講演「共生の時代 ―「力」から「心」へ、インド・パキスタンの対立抗争をめぐって」（東洋大学校友会神奈川支部創立五〇周年大会、平成十年九月十二日、横浜）
講演「シルクロードの今」（東洋大学校友会三多摩支部総会、平成十年九月二十六日、吉祥寺）
講演「共生とヨーガ」（日本ヨーガ光麗会全国大会、平成十年十月九日、京都）
講演「インド仏教とシルクロードの仏教」（天台宗茨城教区研修会、平成十年十二月八日、土浦）
講演「共生の原理としての仏教、特に非暴力の可能性について考える」（中央学術研究所第三二回学術総会、平成十年十二月十三日、東京）

田村晃祐

〈著書〉

『仏教を生きる（上）』（単著、日本放送出版協会、平成十年四月一日、A5判、一六九頁）
『仏教を生きる（下）』（単著、日本放送出版協会、平成十年十月一日、A5判、一七五頁）

〈論文〉

「日本仏教の特色と他宗教との関係」（単著、「東洋学研究」第三五号、シンポジウム報告「日本宗教文化の種々相―日本における諸宗教の相剋と融合」、平成十年二月二十八日、B5判、一二六～一三二頁）
「法然と親鸞―悪人正機説をめぐって」（単著、「東洋の思想と宗教」第十五号、平成十年三月二十五日、A5判、一～一九頁）
「真理における和」（単著、「とみのおがわ」、平成十年四月三十日、A4判、四七～五一頁）
「公開講演 最澄と徳一」（単著、「駒沢短期大学仏教論集」第四号、平成十年十月三十日、A5判、一～二二頁）
「最澄の戒律」（単著、「平和と宗教」第一七号、平成十年十二月二十一日、A5判、二七～三九頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職
日本仏教学会理事／仏教思想学会理事／早稲田大学東洋哲学会理事／日本印度学仏教学会評議員／日本宗教学会評議員
学会における研究発表
「『守護国界章』下巻における一乗論争―法宝の一乗説をめぐって」（早稲田大学東洋哲学会平成十年度学術大会、平成十年六月十三日、早稲田大学）

「河口・能海をめぐる明治の社会と宗教」（東洋大学アジア・アフリカ研究所、講演と討論の会「河口慧海・能海寛――二人の先駆者の生涯と今日的意義」、平成十年十月十七日、東洋大学）

〈調査活動〉

「仏教を中心とした〈共生〉の原理の総合的研究」（平成十年度文部省科学研究費による研究、研究分担者）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部：日本仏教史（白山、Ⅱ部）

仏教学演習（白山、乗入れ（Ⅰ部⑤、Ⅱ部③））

大学院：仏教学特論Ⅲ（前期）

仏教学演習Ⅱ・仏教学研究指導Ⅰ（前期）

仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅰ（後期）

学外担当科目

東洋哲学演習Ⅰ（早稲田大学大学院）／東洋哲学研究指導（同）／日本思想史特殊研究（二松学舎大学大学院、集中講義）

〈社会活動〉

財団法人聖徳太子奉讃会監事（五月末解散）

講座「仏教を生きる」（NHK第三チャンネル、第三日曜七時三〇分～八時三〇分、再放送、第三土曜一四時～一五時、四月～十二月）

講座「『教行信證』を読む」（東方学院）

〈大学・学部の管理・運営〉

大学院委員長／大学院委員長に伴う諸委員会委員／学校法人東洋大学理事／学校法人東洋大学評議員／学校法人東洋大学財政検討委員会委員

清水　乞

〈論文〉

「Paṇḍari Viṭṭhala 著 Rāgamāla 所説の観想図像」（単著、「東洋学論叢」第二三号〈「東洋大学文学部紀要」第五一集（印度哲学科篇）〉、平成十年三月三十日、A5判、八二～一一三頁）

「観仏から造仏へ」（単著、「日本仏教学会年報」第六三号、平成十年八月二十日、A5判、一～一三頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

密教図像学会委員／印度学仏教学会／日本仏教学会

〈調査活動〉

「仏教を中心とした〈共生〉の原理の総合的研究」（平成十年度文部省科学研究費による研究、研究分担者）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部：サンスクリット文献講読①・②（朝霞、Ⅰ部）

インド文化論Ⅰ（白山、乗入れ）
インド哲学演習（白山、乗入れ〈Ⅰ部③、Ⅱ部①〉）
大学院：仏教学特論Ⅱ・印度哲学研究指導（Ⅱ前期）
印度哲学特殊研究Ⅲ・印度哲学研究指導Ⅱ（後期）
〈大学・学部の管理・運営〉
印度哲学科第Ⅰ部主任／文学研究科仏教学専攻主任

森　章司

〈論文〉
「『法顕伝』などインド旅行記に見られる異部派比丘」（単著、「大倉山論集」第四二号、平成十年三月三十一日、A5判、一～三六頁）
「原始仏教経典における"ksama"（懺悔）について」（単著、「東洋学論叢」第二三号〈「東洋大学文学部紀要」第五一集（印度哲学科篇）〉、平成十年三月三十日、A5判、四四～八一頁）
「仏教における経と律の葛藤」（単著、「平和と宗教」第一七号、平成十年十二月二十一日、A5判、一六～二六頁）
〈学会活動〉
所属学会ならびに役職
日本印度学仏教学会理事
〈調査活動〉
「仏教を中心とした〈共生〉の原理の総合的研究」（平成十年度文部省科学研究費による研究、研究分担者）
〈教育活動〉
学内担当科目
学　部：仏教学演習（白山、乗入れ〈Ⅰ部③、Ⅱ部①〉）
大学院：仏教学特殊研究Ⅲ・仏教学研究指導Ⅱ（後期）
〈社会活動〉
講演「人の命、もののいのち」（第二回・大倉山精神文化講座、平成十年八月九日、報徳博物館〈小田原〉）
講演「譬喩のこころ」（築地本願寺文化講座、平成十年八月十五日、築地本願寺）
講演「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究・中間報告」（第三〇回・中央学術研究所研究総会、平成十年十二月十三日、立正佼成会セレニティホール）

川崎信定

〈著書〉
『釈尊のおしえ（改訂第二版）』（単著、中山書房仏書林、平成十年十月二十五日、B5判、一二四頁）
〈論文〉
「一切智から薩婆若への展開」（単著、松長有慶編著『インド密教の形成と展開』〈法蔵館、平成十年七月二十一日〉、A5判、八七～一〇二頁）
「『チベットの死者の書』と輪廻転生」（単著、大法輪閣編集部

編『輪廻転生―生まれ変わりはあるか』（大法輪閣、平成十年十一月二日）、A5判、六三～七七頁）

「仏教における心の教育」（単著、尾田幸雄編『生涯学習社会における心の教育』（『心の教育実践講座（全十巻）』第五巻、日本図書センター、平成十年十二月二十日）、A5判、二五～三五頁）

「チベット学の現況について」（単著、「東方学」第九六号、平成十年十一月三十日、A5判、一～二頁）

〈事典分担執筆〉

「種子」の項（単著、『日本仏教史事典』（吉川弘文館、平成十年十二月二十日）A4判、二七三頁）

〈研究報告〉

「筑波大学　東西言語文化の類型論　特別プロジェクト研究報告書　平成九年度Ⅰ　PART1・PART2」（共著、筑波大学哲学・思想系、平成十年三月二十五日、B5判、五九二頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本西蔵学会委員／財団法人東方学会評議員／仏教思想学会評議員／日本印度学仏教学会理事／日本宗教学会理事／比較思想学会評議員／日本倫理学会／日本思想史学会／人体科学会／国際仏教学会

〈調査活動〉

「仏教を中心とした〈共生〉の原理の総合的研究」（平成十年度文部省科学研究費による研究、研究分担者）

「筑波大学　東西言語文化の類型論特別プロジェクト」（客員研究員）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部：宗教学概論Ⅱ（白山、乗入れ）

仏教思想論Ⅱ（白山、乗入れ）

チベット文献講読（白山、乗入れ）

仏教学演習（白山、乗入れ（Ⅰ部⑥、Ⅱ部④））

大学院：仏教学演習Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（前期）

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（後期）

〈社会活動〉

財団法人東洋文庫「東洋学報」編集委員／財団法人東方研究会評議員／財団法人聖徳太子奉讃会評議員／財団法人国際仏教交流センター評議員

講演「仏教における智慧について」（大正大学オープンカレッジ夏期公開講座（緑陰講座第四回）、平成十年八月六日、大正大学）

講演「チベット佛教と死者の書について」（経済同友クラブ、平成十年九月二十八日、大手町パレスホテル）

講演「ほとけの智慧・人の智恵」（真言宗御室派関東地区教学研修会、平成十年十月二十四日、横浜市薬王寺）

講演「人間の智恵・ほとけの智慧」「なぜ初七日・四十九日法要が必要か？―『チベットの死者の書』から考える」（福山観音寺第三十九回密教講座、平成十年十一月三日、福山）

〈大学・学部の管理・運営〉

大学院ＯＡ機器委員会文学研究科委員／国際交流センター所員／国際交流センター中国語学セミナー実行委員長／東洋学研究所運営委員／印度哲学科第Ⅱ部主任

橋本泰元

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本南アジア学会紀要編集委員／日本印度学仏教学会／日本宗教学会／日本仏教学会

学会における研究発表

「カビールのバクティ思想」（日本南アジア学会第十一回大会、平成十年十月三日、東京都立大学）

「カビールのバクティ思想について」（第三回バクティ研究会（代表：島岩）、平成十年十二月十二日、拓殖大学）

〈調査活動〉

「仏教を中心とした〈共生〉の原理の総合的研究」（平成十年度文部省科学研究費による研究、研究分担者）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部：ヒンドゥー教概説（朝霞、Ⅰ部／白山、Ⅱ部）
インド哲学演習②（朝霞、Ⅰ部）
インド哲学演習（白山、乗入れ〈Ⅰ部⑤、Ⅱ部③〉）
ヒンディー文献講読（白山、Ⅱ部）

学外担当科目

ヒンディー語Ⅰ・Ⅱ、インド言語文化研究Ⅰ・Ⅱ（大正大学）／ヒンディー語Ⅲ・Ⅳ（同）／人間探求Ｃ３―Ｃ〈課題レポート〉（同）

〈社会活動〉

講師：シルクロード文化研究所

〈大学・学部の管理・運営〉

学部朝霞主任／文学部自己点検・自己評価委員／東洋学研究所研究所員

渡辺章悟

〈著書〉

『蔵梵法華経索引（Tibetan-Sanskrit Word Index to the Saddharmapuṇḍarīka-sūtra）』（共著、霊友会、平成十年十二月二十日、Ｂ５判、一～三一九頁）

〈論文〉

「Prajñāpāramitā の四つの語源解釈」（単著、「印度学仏教学研究」平成十年三月二十日、第四六巻第二号、一三〇～一三七頁）

〈事典分担執筆〉
「般若経」「般若心経」「金剛般若経」「理趣経」「大智度論」「弥勒信仰」「釈迦信仰」「観音信仰」の項（単著、『岩波　哲学・思想事典』岩波書店、平成十年三月十八日、菊判）
〈学会活動〉
所属学会ならびに役職
日本印度学仏教学会／日本佛教学会／日本宗教学会／仏教思想学会／日本西蔵学会
〈調査活動〉
「中央アジア出土の仏教梵語写本の研究」（平成十年度文部省科学研究費による研究、研究代表者）
「仏教を中心とした〈共生〉の原理の総合的研究」（平成十年度文部省科学研究費による研究、研究分担者）
〈教育活動〉
学内担当科目
学　部：インド哲学演習①（朝霞、Ⅰ部）
インド哲学演習（白山、乗入れ〈Ⅰ部⑥、Ⅱ部④〉）
仏教思想論Ⅰ（白山、乗入れ）
仏教梵語講読（白山乗入れ）
宗教学B（朝霞、Ⅰ部）
仏教と社会（白山、乗入れ）
〈社会活動〉
財団法人仏教伝道協会研究室研究員（英訳大蔵経編集委員会所属）／財団法人東方研究会研究員
〈大学・学部管理・運営活動〉
教養課程代議委員／教職課程運営委員会委員／文学部内カリキュラム検討委員会委員／文学部内入試小委員会委員／井上円了記念学術センター研究員（円了研究部門）／東洋大学東洋学研究所研究所員

伊吹　敦

〈論文〉
「『金剛経変相』について」（単著、「東洋学研究」第三五号、平成十年二月二十八日、B5判、二一四～二三六頁）
「『曹渓大師伝』の成立をめぐって」（単著、「東洋の思想と宗教」第十五号、平成十年三月二十五日、A5判、八二～一〇九頁）
「菩提達摩の『楞伽経疏』について（上）」（単著、「東洋学論叢」第二三号〈「東洋大学文学部紀要」第五一集〉、平成十年三月三十日、A5判、一～二三頁）
「初期禅宗文献に見る禅観の実践」（単著、「禅文化研究所紀要」第二四号、平成十年十二月十九日、A5判、一九～四五頁）
「地論宗南道派の心識説について」（単著、「印度学仏教学研究」第四七巻第一号、平成十年十二月二十日、A5判、八六～九二頁）

「地論宗北道派の心識説について」（単著、「仏教学」第四〇号、平成十年十二月二十日、A5判）

〈発表要旨〉

「敦煌資料による禅宗研究の現状と課題」（単著、「東方学」第九五号、平成十年一月三十日、A5判、一五九～一六〇頁）

〈事典分担執筆〉

「無（中国における）」「碧巌録」「十牛図」「頓悟／漸悟」「公案」「臨済録」「六祖壇経」「菩提達摩」の項（単著、『岩波哲学・思想事典』岩波書店、平成十年三月十八日、菊判）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会コンピュータ利用委員会委員／仏教思想学会幹事／日本仏教学会／財団法人東方学会／早稲田大学東洋哲学会

学会における研究発表

「地論宗北道派の心識説について」（仏教思想学会第十四回学術大会、平成十年六月二十日、東京大学）

「地論宗南道派の心識説について」（印度学佛教学会第四九回学術大会、平成十年九月五日、鶴見大学）

〈調査活動〉

「仏教を中心とした〈共生〉の原理の総合的研究」（平成十年度文部省科学研究費による研究、研究分担者）

「中国仏教遺跡の現状の調査」（東洋大学海外研究費による研究、平成十年八月一日～十四日、敦煌莫高窟、炳霊寺、麦積山等の現状を視察）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部：中国仏教史（朝霞、Ⅰ部／白山、Ⅱ部）

禅の思想と文化（白山、乗入れ）

仏教学演習（白山、乗入れ〈Ⅰ部④、Ⅱ部②〉）

インド哲学演習⑤・仏教学演習⑤（白山、Ⅱ部、再履）

学外担当科目

東洋哲学演習Ⅱ（早稲田大学）

〈社会活動〉

財団法人東方研究会兼任研究員

〈大学・学部の管理・運営〉

情報機器運営委員会委員／白山情報機器運用委員会委員／文学部内情報機器関係小委員会委員

平成十年度演習ゼミ活動報告

渡辺霊悟

インド哲学演習①　朝霞

① テーマ「ウパニシャッドを読む」

② メンバー　田村洋介（幹事）他、二年生十三名

③ 活動報告

本年度はチャーンドーグヤ・ウパニシャッド第一章と第二章のサンスクリット原文を読んだ。初めに担当者がウパニシャッド全体の概説と本ウパニシャッドの構成及び解説を行い、第一章は英訳を補助資料にして、このウパニシャッドの思考方法に慣れることを試みた。特に前期はサンスクリットのCDやカセットテープなどを利用して、実際にウパニシャッドの朗読を聴いてもらい、サンスクリットの雰囲気に親しんでもらうことにした。後期からは実際にサンスクリットを読んでもらった。あらかじめ分担を決めておき、毎回一人のゼミ生にレポートしてもらい、それを全員で批判するという方法を取ろうとしたが、他のゼミ生からの発言はあまり見られず、ほとんど担当者が解説することになってしまった。人数の関係からゼミ生もわずか一、二回当たっただけであったが、それでも第二章までなんとか読み通すことができた。

恒例となった夏合宿は、本年は山中湖セミナーハウスにて行った。あいにく台風に遭遇してしまい、交通機関が分断されたため、何人かは欠席、あるいは一日参加が遅れたが、二泊三日のすべてを室内での学習にあてることができた。四年生は卒論(制作)の中間発表を行い、その外は『金剛般若経』とヴェーダの有名なフレーズを読み、インド仏教とインド哲学の代表的な宗教思想に触れてもらった。これはまたサンスクリットの語学力向上にも資することができたと思う。

橋本泰元

インド哲学演習② 朝霞

① テーマ「ヒンドゥー教思想入門」

② メンバー 倉知敦(幹事)・大和由紀(書記)他、二年生二四名

③ 活動報告

昨年と同じように、ヒンドゥー教の中心思想であるバクティ(信愛・帰依)の思想を、史上初めて明示された『バガヴァッド・ギーター』の中に観てゆこうとした。

初めに担当教員が『ギーター』の使用テキスト(インド流布本)と和訳・参考書などの紹介・解説をし、同時にバクティ思想の概説を開始した。『ギーター』の輪読の進展に合わせて、思想概説を行う予定であった。これにより受講生の語学力増進と思想理解の深化を図ろうとしたのである。しかしながら、受講生の関心領域の多様性とヒンドゥー教思想史の一般的知識の少なさ、また彼らの語学能力の格差の大きさが障害となり、結局、輪読の順調な進展は全く望めず、デーヴァナーガリー文字の習得、辞書の引き方、文法書の読み方など、初等語学の訓練に始終した感がある。一方、バクティ思想の概説をしながら、自由研究発表を促したが、今年度は発表者が現われなかった。

そこで、受講生の関心の多様性に対処すべく、前期末課題として、David Kinsley: Hindu Goddesses Delhi: Motilal Banarsidass の分担和訳・訳注を課した。ヒンドゥー教研究書

（英文）に慣れてもらうためである。術語の和訳、適切な訳注を施した好レポートも見受けられた。

また、前期末にインド料理店で懇親会を催した。インド人店長の解説もあり、好評だったようである。受講生の多さと学生がゼミ運営について全く慣れていない点が反省される。

清水　乞

インド哲学演習　白山（乗り入れ、Ⅰ部③、Ⅱ部①）

① テーマ「インド美学と芸術思想」

② メンバー　原孝史（幹事）東海林靖生（副幹事）他、四年生三九名、三年生十一名、二年生六名、大学院三名

③ 活動報告

担当者によるインド美学の概説と平行して、ゼミ参加者が各自興味を持っている芸術分野（文学、絵画、舞踊、ドラマ、建築・庭園）に従ってグループを構成し、各自が西洋・東洋を問わず、作品を選定し、グループで討議を行ったため、発表は時間的にも分析水準もまちまちであった。特に注意した点は、インドの芸術理論を基準として、主題にした作品を分析することはできない、という結論の発表者に対して、ゼミの課題を再認識した上で討議することをうながした。発表の目的はインド芸術論の適否を問うことではなく、インド芸術論に対する個人的評価を越えて、この理論を前提として作品を構造的に分析することにある。この点を全体が再確認して、以後の発表を続けることにした。その結果、その後の発表は一応うまくいったといえる。しかし、受講者の多さが問題点であった。

ゼミ見学会では卒論（制作）の発表を四年生が行っている最中であったので、実態を見てもらうことはできなかった。しかし、ゼミ活動とは別の課題で、ゼミ活動の成果を発表し、質疑応答する様子は、二年生、三年生に大きな刺戟を与える好機であったと思う。

具体的なグループは、次の通りである。

1. 文学グループ：金井、田辺、近藤
2. 絵画グループ：原、杉森、板垣、菅原
3. 舞踊グループ：越田、高島、藤木
4. ドラマグループ：木島、小野田、山岸
5. 建築・庭園グループ：松永、和田、東海林

その他、届け出のない学生がいるが、グループに属さないで一人で研究することを申し出ている学生がいる。

菅沼　晃

インド哲学演習　白山（乗り入れ、Ⅰ部④、Ⅱ部②）

① テーマ「インド思想の人間観」

② メンバー　助光明良（幹事）他、四年生十六名、三年生十名、二年生二名、大学院四名

③ 活動報告

1、本ゼミの目的は二つあり、一つはサンスクリットをイン

ドの伝統的な学習方法で学び、インドの伝統的な文法観念を理解させ、サンスクリットによるインドの思考方法を身につけさせることである。他は、サンスクリット文献を用いて、インド古典中に示されている人間観を明らかにすることである（全体を4グループに分け、発表する形式をとった）。第一の目的のためには、インドの初級教科書、Saṃskṛta-pāṭhamālā II の第1章～第8章までを各グループが担当、発表した（四月～九月）。

2、八月八日（土）～十日（日）、山中湖セミナーハウスで合宿（インド思想研究会、大学院と合同）。四年生の卒業論文中間発表。インド思想研究会と共に Rāmāyaṇa 第1巻第9章講読、大学院研究発表聴講。

3、十月から、各班ごとの研究発表。「人間の行為と結果、マヌ法典・バガヴァッド・ギーター」「Mahābhārata の女性観」「Mahātma Gandhi について」「Ambedkar と新仏教」「タゴールの思想」「Manu 法典と DV」など。

4、十一月、四年生の卒業論文の第二回中間発表。

5、十二月、三年生の卒業論文指導会。

6、本年度ゼミ活動の報告書を平成十一年二月に作成。

橋本泰元

インド哲学演習　白山（乗り入れ、I部⑤、II部③）

① テーマ「中世ヒンドゥー教思想研究」

② メンバー　若松武樹（幹事）外川景子（書記）他、四年生十三名、三年生十二名、二年生三名、大学院一名

③ 活動報告

昨年度に引き続き、十世紀ごろの『バーガヴァタ・プラーナ』において完成された民衆的なバクティ思想と、それが北インドの中・近世の民衆的バクティ運動の中でどのように展開していったかを中心課題とした。

学年当初、担当教員が主に新入ゼミ生を中心に、使用テキスト（インド流布本）と英訳、和訳、および研究書の解説を行った。その後、ヒンドゥー教関連の主に事典を中心とした参考文献の案内を行った。『バーガヴァタ・プラーナ』「ラーサの五章」の継続輪読は、三年生を中心に一回一頌のペースで続けた。前期末には、受講生の関心領域の多様性に対応すべく、英文の研究書、David Kinsley: Hindu Goddesses, Delhi: Motilal Banarsidass の分担和訳・訳注付けの課題を、二・三年生に課した。術語の和訳、適切な訳注を施した好レポートもいくつか見受けられた。

後期中間ごろより、四年生の卒業論文、または卒業制作の中間発表を開始した。しかしながら、発表者数が予定者数の半分にも至らなかった。また、三年生以下の自由研究の発表が全く見られなかった。この点は大いに反省される。また、ゼミと卒論、または卒業制作の指導の時間が同一であるために、中間発表を行ってもらっているが、活発な質疑応答がなく、ゼミ運営の難しさを感じざるを得ない。

三年編入生を二人迎えたが、熱心にゼミに参加していることも銘記したい。

渡辺章悟

インド哲学演習　白山（乗り入れ、Ⅰ部⑥、Ⅱ部④）

① テーマ「般若・中観研究」

② メンバー　植村豪（幹事）他、四年生三名、三年生六名、二年生一名、大学院一名

③ 活動報告

昨年度に続いて『八千頌般若経』を講読した。今年度からの新ゼミ生のために最初に初期大乗仏教、及び「般若経」全体の概説を何回か行い、つづいてサンスクリットを中心に『八千頌般若経』をゼミ生が分担してレポートしていった。毎年の事であるが、ほとんど担当者と分担者との質疑応答に始終し、他のゼミ生からの積極的な発言がみられなかった。ゼミとしては何らかの方法を新たに導入する必要を感じている。

ゼミ生の人数が少ないこともあり、三年生を中心として何回か発表の機会があったために、原文で考えてゆくための訓練にはなったと思う。

恒例となった夏合宿は、本年は山中湖セミナーハウスにて行った。あいにく台風に遭遇してしまい、交通機関が分断されたため、何人かは欠席、あるいは一日参加が遅れたが、二泊三日のすべてを室内での学習にあてることができた。四年生は卒論（制作）の中間発表を行い、その外は『金剛般若経』とヴェーダの有名なフレーズを読み、インド仏教とインド哲学の代表的な宗教思想に触れてもらった。これはまたサンスクリットの語学力向上にも資することができたと思う。

森　章司

仏教学演習　白山（乗り入れ、Ⅰ部③、Ⅱ部①）

① テーマ「原始仏教研究」

② メンバー　南隆弘（前期幹事）・川島亮平（後期幹事）他、四年生十二名、三年生七名、二年生五名

③ 活動報告

共同研究と個人研究の二本立てで進めた。

共同研究は（1）「"Dhammapada" の教えは現代においても価値があるか、ないか」、（2）「釈尊（仏教）は他の宗教に寛容であったか、なかったか」、（3）「在家者も出家者と同じ悟りを得られるか、得られないか」という三つのテーマについて、ディベート形式によって進めた。「ディベート」が学問の方法論としてふさわしいと考えていたわけではなかったが、普通の「学問」では扱わないようなテーマを取り上げざるをえないというところがあって、いわゆる「学問」の隘路を埋める役割を持つと再認識しかけている。その成果は昨年度の「森ゼミ紀要」第六号と今年度の「森ゼミ紀要」第七号（一九九九年四月上旬発行予定）を参照されたい。

なお、後期から学生自身の提案で「ディベート」の方式を若干改めた。事前に強制的にグループ分けしたこと、グループ別の作戦会議の時間を設けたことである。

個人研究は、夏休みの合宿と後期の冒頭において、四年生の「卒業論文」「卒業制作」の、三年次以下生の「自由研究」（「卒業論文」「卒業制作」を視野に入れた上での）の発表と指導を行った。

なお、休む者、遅刻する者が多くてディベートに支障を来たすということから、これも学生自身の提案によって、欠席や遅刻、特に発表担当日の欠席（三日の欠席に換算する）を厳しくチェックし、定めた日数以上の欠席者には無条件に単位を与えないという決まりを作ったので、目に見えて無断欠席や遅刻が減少した。

「卒業論文」「卒業制作」については、当ゼミでは「卒業論文」よりも「卒業制作」として、「資料集」を作ることを指導している。勢い、かなり膨大な原始経典にじかに当たらなければならない（索引や翻訳を最大限に利用せざるをえないのが現状であるが）ことになるので、質は下手な「論文」より格段に上がったと評価している。

伊吹　敦

仏教学演習　白山（乗り入れ、Ⅰ部④、Ⅱ部②）

① テーマ「禅思想史研究」

② メンバー　小林生麻（幹事）他、四年生十名、三年生七名

本ゼミは、中国仏教の中でも、最も中国的な性格を多分に持つ「禅」を中心に、その思想の特質や成立、変化をたどってゆくことを目的とするものである。

本年度も昨年度と同様、『碧巌録』をテキストに選び、輪読で読み進めた。周知のごとく、『碧巌録』は、『無門関』などとともに最も有名な「公案集」の一つであり、古来、禅門では「宗門第一の書」として尊ばれてきた。そうした伝統的評価の是非はしばらく置いても、本書が中国の禅思想の一つの典型を示していることは疑う余地がない。しかも、本書には、禅に関する興味深い逸話や、格調高い文学性などがふんだんに盛り込まれており、いうところの「公案禅」に留まらない、豊富な内容を有している。従って、本書を読解することによって、禅思想と、それを取り巻く様々な要素を学びうることが期待されるのである。

禅文献の特色として、テキストの文字どおりの意味と、その内容との距離が極めて大きいということがあり、特に初めてゼミに参加した学生は、最初は非常に当惑したようであった。しかし、上級生の発表や発言に触れるなどして、次第に理解のコツを掴んできているように思われた。

『碧巌録』に載せられているような禅問答には、極めて難解なものが多く、時には活発な議論が交わされることもあった。しかし、それにも関わらず、皆が納得できるような見解に到達す

ることができない場合がしばしばあった。また、発言者が一部の学生に偏ったり、就職活動との関係で四年生に欠席者が多かったりと、本年度の授業は、必ずしも成功であったとは言い難い面も見られた。

なお、ゼミ活動のもう一つの柱である卒論指導については、授業中での研究成果の発表は全く行わず、基本的には研究室での個別指導で対応した。授業時間内での卒論指導には余りに制約が多いし、そちらに時間を裂かれてテキストの読解が進まなくなることを恐れたためである。この方針は、できれば来年度以降も堅持したい。

田村晃祐

仏教学演習　白山（乗り入れ、Ⅰ部⑤、Ⅱ部③）

① テーマ「鎌倉仏教の研究」

② メンバー　中村隆太郎（幹事）高橋誠司・堀内里美・細貝容子・荒川優子・林亜都美（副幹事）他、四年生二三名、三年生二五名、二年生五名、大学院一名

③ 活動報告

昨年の法然研究の継続として、引き続き道元の講読を行うことにした。最初に道元の略伝について、入宋前、宋での悟り、帰国後の活動の三期に分かって学生に報告を求めた。次いで、漢文に習熟することをも一つの目的としているので、漢文で書かれた文献を読むこととし、最初に『普勧坐禅儀』、次いで『学道用心集』を講読した。学生に割り当てて調査し、原文に返り点送り仮名を付し、語釈・現代語訳をそえたペーパーをコピーして全員に渡し、発表者に質問し、教師が適宜コメントを加える形式で授業を進めた。

また、十月から十二月にかけて卒論の中間発表を求め、全員で質疑を行ない、教師の意見を与えた。

九月には、二、三、四日と三泊三日で京都へゼミ旅行を行ない、第一日は道元ゆかりの建仁寺、近くの六波羅蜜寺、知恩院から円山公園傍らの道元茶毘所を巡拝した。第二日は宇治の興正寺、黄檗山万福寺、道元の最初に住した安養院跡、道元建立の最初の寺院、興聖宝林寺跡などを巡歴した。その夜、宿で卒論の中間発表を行なった。第三日は、花園の妙心寺から天龍寺、仁和寺などを訪れて帰京した。禅宗寺院、特に道元ゆかりの寺を中心とし、稔り豊かな旅であった。

川崎信定

仏教学演習⑥　白山（Ⅰ部・Ⅱ部相互乗り入れ）

① テーマ「唯識思想の基礎的原典の講読研究」

② メンバー　岡本大二郎（幹事）石場恵子（副幹事）他、四年生四名、三年生十一名、二年生三名、大学院二名

③ 活動報告

大乗仏教の重要教理の一つである唯識思想の基礎的原典の講読を通じて、テキスト批判・文献取り扱いの基本を養成し、今

後の卒論研究の基盤を作ることを目的としたゼミナール。本年度は『唯識二十論』を取り上げ、シルヴァン・レヴィの梵文テキスト、およびその後の補訂・チベット語訳・漢訳、また邦訳諸版の検討と思想内容の分析を試みた。出席重視・輪番制の講読担当を参加学生の全員に課し、ほぼ二回平均の発表が行われた。大学院学生参加者や余力のある学生には、パソコン入力による確定版テキストと索引制作を試みさせた。恒例のゼミ合宿は、今年度は実施できず、二回のコンパに振り替えた。

平成十年度開講科目

〈I部〉

朝霞開講科目

インド宗教史　菅沼　晃
仏教学概論　福田亮成
サンスクリット文献講読①・②（サンスクリット語への誘い）　清水　乞
インド古典講読①（説話劇 Pratimā-nāṭaka を読む）　菅沼　晃
ヒンドゥー教概説①　橋本泰元
中国仏教史　伊吹　敦
日本仏教史　蓑輪顕量
インド哲学演習①（ウパニシャッドを読む）　渡辺章悟
インド哲学演習②（ヒンドゥー教思想入門）　橋本泰元
仏教学演習①（良遍著『観心覚夢鈔』を読む）　蓑輪顕量
仏教学演習②（インド伝奇文学「屍鬼二十五話」原典研究）　島田茂樹

白山開講科目

インド古典講読②　渡邊郁子
ヒンドゥー教概説②　橋本泰元
ヒンディー文献講読　宮本久義
卒業論文（制作）

〈II部〉

インド宗教史　菅沼　晃
仏教学概論　福田亮成
サンスクリット文献講読　渡邊郁子
インド古典講読　渡邊郁子
ヒンドゥー教概説　橋本泰元
中国仏教史　伊吹　敦
日本仏教史　田村晃祐
ヒンディー文献講読　橋本泰元
インド哲学演習⑤／仏教学演習⑤（中国仏教研究）（再履）　伊吹　敦
卒業論文（制作）

〈相互乗入れ科目〉

インド哲学演習（Ⅰ部③、Ⅱ部①）（インド美学と芸術思想）　清水　乞

インド哲学演習（Ⅰ部④、Ⅱ部②）（インド思想の人間観・人間の生き方について）　菅沼　晃

インド哲学演習（Ⅰ部⑤、Ⅱ部③）（中世ヒンドゥー教思想研究）　橋本泰元

インド哲学演習（Ⅰ部⑥、Ⅱ部④）（般若・中観研究）　渡辺章悟

仏教学演習（Ⅰ部③、Ⅱ部①）（原始仏教研究）　森　章司

仏教学演習（Ⅰ部④、Ⅱ部②）（禅思想研究）　伊吹　敦

仏教学演習（Ⅰ部⑤、Ⅱ部③）（鎌倉仏教の研究―道元）　田村晃祐

仏教学演習（Ⅰ部⑥、Ⅱ部④）（唯識思想の基礎的原典の講読研究）　川崎信定

パーリ文献講読　石上和敬

チベット文献講読　川崎信定

インド文化論Ⅰ（インド細密画を中心に）　清水　乞

インド文化論Ⅱ　石川　寛

インド文化論Ⅲ（インド文化の拡がりと周縁）　河野亮仙

仏教梵語講読（仏教梵語仏典入門）　渡辺章悟

仏教漢文講読　進藤英幸

仏教思想論Ⅰ（中観思想概説）　渡辺章悟

仏教思想論Ⅱ　川崎信定

仏教思想論Ⅲ　金子芳夫

インド文学　上村勝彦

宗教学概論　川崎信定

外国語文献講読　村石恵照

インド・仏教図像学（密教図像文献講読）　島田茂樹

仏教と社会（世俗社会の中の仏教）　渡辺章悟

ヨーガとその思想（ヨーガ―その実践を通して）　番場裕之

浄土教の思想と文化　五十嵐明宝

密教の思想と文化　真柴弘宗

禅の思想と文化　伊吹　敦

華厳経の思想と文化　小島岱山

イスラム教概説　有見次郎

アビダルマ哲学（修行を中心にした仏教思想の特色）　田中教照

バラモン教哲学　宮本久義

大乗起信論講義　金子芳夫

〈大学院〉

博士前期課程

印度哲学特論（パーリ仏教研究）　森　祖道

印度哲学演習Ⅰ（李通玄撰『十明論』の研究）　小島岱山

印度哲学演習Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅰ（サンスクリット

複合語（samasa）の研究）　菅沼　晃
仏教学特論Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅱ（インド密教儀礼と造型）　清水　乞
仏教学特論Ⅲ（親鸞『教行信證』の研究）　田村晃祐
仏教学特論Ⅳ（「唯識三十頌」を読む）　横山紘一
仏教学演習Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（中観思想原典研究）　川崎信定
仏教学演習Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ（智顗「摩訶止観」の研究）　田村晃祐
仏教学研究指導Ⅰ（律蔵の研究）　森　章司

博士後期課程

印度哲学特殊研究Ⅰ（李通玄撰『新華厳経決疑論』の研究）　小島岱山
印度哲学特殊研究Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅰ（インド哲学・仏教学の諸問題）　菅沼　晃
印度哲学特殊研究Ⅲ・印度哲学研究指導Ⅱ（仏像の原像）　清水　乞
仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（仏教と他派との思想交流）　川崎信定
仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅰ（天台の修道論）　田村晃祐
仏教学研究指導Ⅱ（律蔵の研究）　森　章司

平成十年度卒業論文

〈Ⅰ部〉

月田　充　Sāhityadarpaṇa における vyañjanā 概念
荻原　崇之　「達摩説話」の発展に見る日本での禅と栄西の伝えた禅宗の意義
中野　浩二　立正安国論における日蓮像
田村　範子　チベット民話における人間観　特に「賢者」と「愚者」について
岡本大二郎　『倶舎論』「破我品」における犢子部のプドガラ説批判にみる世親の自我観
手島　信善　初期仏教教団と王権の関係について
佐々木常夫　白隠禅師―『坐禅和讃』を読んで
三嶋　智康　一遇の名号観について
篠原賢次郎　『欲異抄』に見る親鸞の善悪観
中浦　黄太　A.L.Basham: The Wonder that was India 第6章の翻訳
緑川　正人　「抜隊得勝について」
石場　恵子　修習における慈悲の生起について―『入菩提行細疏』第8章「自他平等性」の修習に関して
菊嶋　朝子　病とは何か―Caraka-Saṃhitā を中心に
利根川英子　古代インドの死生観および他界観

富田　忍　中国仏教と孝の観念
平岡　明子　ヒンドゥー社会における女性の地位
堀内　里美　源信の「臨終行儀」に学ぶ―『往生要集』を中心として
宮崎　昌平　『正法眼蔵』に見る生死観
松本　恵子　『摧邪論』における明恵の思想
伊勢　乃弓　デーヴィー・マーハートミヤにおけるカーリー女神
細貝　容子　空海と即身成仏思想
平田奈保子　時間論考察―『正法眼蔵』「有時」の巻を読む
志賀　淳　不生禅の研究
西澤　秀貴　「うしかひ草」
高田こと子　アーリア人の食物信念 〈K.T.Achya Indian Food より〉
関口　朋弘　Tara 関する比較考察
中山　晋介　井上円了の『仏教活論序論』と現代
見崎　善之　『バガヴァッド・ギーター』全章の文法的解釈
鳥井　信行　「駒澤大学仏教経済研究」の分析から見た仏教の社会性―仏教経済学の限界
南　隆弘　アバダーナ（譬喩経）における業思想
原　孝史　Sāhityadarpaṇa における rasa の考察
青田　徹　『マハーバーラタ』第一巻におけるアムリタの位置付け

福田　綾子　『西遊記』にみられる民衆の仏教受容
横山　毅　部派仏教と初期大乗仏教の考察
木島美代子　密教儀礼：童子経の作法の研究―白宝口抄を軸に
草村貴美恵　「マヌ」法典における罪と贖罪
小野田昌子　映画の巨匠サタジット・レイと「一粒の露」
植野　裕子　叙事詩 Rāmāyaṇa の王女 Sītā の生き方を通しての女性観
谷口　哲哉　ガンディにおける神と宗教
高島奈穂美　音楽芸術における演奏者の演奏時の心理について
須藤　健一　スバス・チャンドラ・ボースの行動及び思想
安田　美佐　Rabindranath Tagore―生の実現
藤本久美子　マンダラについて―マンダラを見ながらチベット、中国、日本におけるインド中・後期密教の対比
長谷川　大　インドにおける性愛の思想と女性の美しさについて
前田　忍　アルダナーリーシュヴァラの研究
品川　薫　「無相思塵論」の解釈とその周辺
杉森　陽子　マンダラの研究―金剛界マンダラについて
岩橋　誠一　インド娯楽映画について
植村　豪　ダルマキールティのニヤーヤビンドゥにおける

プラトヤクシャの考察
金井　陵策　なぜインドに悲劇が無かったのか
田邊　忍　日本人の妖怪観とその変化
玉木　綾　アーユルヴェーダと倶舎論における香りの位置づけ
木下　永一　日蓮と樗牛―樗牛が日蓮にみたもの、樗牛の思想変動を通して
加藤　泉　Laksmī について
宮原　武虎　『無門関』の機能性について
佐藤　安広　ヒトーパデーシャとインド
青木　美帆　Bhagavadgītā おける3つの道
近藤　聖治　三大文化圏にみる音楽観
藤森　俊樹　清沢満之の思想の変遷―精神主義から我が信念へ
林　貴子　「BHAJA GOVINDAM」翻訳
姜　美蘭　鴨長明の『方丈記』から捉えた無常観
尾崎　夏生　バルトリハリ考
北村　真紀　原始仏教における女性―釈尊は彼女たちに何を説いたか
深澤　孝之　デーヴァダッタ
佐藤　学　神道論書に見られる仏教思想の影響―吉田兼倶『唯一神道名法要集』をめぐって

〈II部〉
元井　美和　アジャンタの石窟
中園　彰道　中国における華厳受容についての一考察
茂木　健司　「詩」に内在する普遍的「美」の探究―芸術の一部として扱われる「詩」には普遍的「美」が内在するのか
高橋由美子　原始仏教における死と涅槃の関係についての考察
横森　弘樹　古代インドの文献における酒について
秋川　龍太　ナーダ、あるいは美の本質について
河村　章広　VIRAHA-BHAKTI 第3章　英文邦訳
藤ヶ崎恵美子　「中」について
春原　太士　『ウパデーシャ・サーハスリー』におけるシャンカラの思想とインド思想との関係の考察
樗松　郁磨　日本人にとっての思想と宗教概念
江頭　新一　ミーマーンサー学派におけるアートマン存在の論証
安藤百合加　Devīmāhātmya における女神 Kalī についての一考察
越田　宏子　サンスクリット古典劇 Kūṭiyāṭṭam 概説
酒井　香　パハーリー絵画におけるシヴァとパールヴァティーの表現
佐藤　篤子　青年空海仏門への道を探る―『三教指帰』から

千葉久美子　信仰の原風景からたどる日本宗教史

土居原広史　他力の信心について—親鸞の罪悪感をとおして

中村隆太郎　『喫茶養生記』巻之第一「五蔵和合門」における栄西の思想—特に栄西の禅密観とのかかわりについて

細田　正江　『一枚起請文』にみる万人救済の思想について

石井友紀子　仏説に見られる馬の研究

植田　真弓　ヒンドゥー教における女神の二面性について

中村　昌臣　『御文』における蓮如の思想

西沙　恵子　蓮華の神聖性

大角　一郎　ガンディー

森野　茂樹　廓庵禅師『十牛図』における禅思想

丸山美樹子　基本形成力

安仲亜紀子　南伝大蔵経における mettā ついて

瀬谷　整　沙弥の生活について

江村　牧子　ストゥーパの研究

田野真由美　『正法眼蔵』「袈裟功徳」に見る袈裟の作法と功徳

江端　一高　THE SAMVARODAYA-TANTRA SELECTED CHAPTERS の和訳

清水奈津子　諸律における安居健渡の比較対照

池田　雅一　『西陽雑俎』「寺塔記」にみる仏教の一側面

木下　真一　『正法眼蔵』に見られる臨済批判

田近　潔美　ニンバールカの思想研究のための基礎作業—ブラフマンとアートマン

斉藤　友和　道元禅師の和歌と思想—「詠本来面目」の一首に読む道元の思想

小林　一弥　仮面に関する一考察

松永　広人　平安時代の仏教庭園と夢窓国師の枯山水庭園の比較と禅の芸術性についての考察

吉岡　大介　Jīvagosvāmī'sReligionofdevotionand Love の翻訳

横川　昌代　インドにおける菩提樹—かさまの木を中心とした考察

大学院修士論文

増田　智士　ダルマキールティの推理論における svabhāva-pratibandha について

鈴木　洋州　仏教建築論における場所の研究—修行の環境問題を中心として

青木智恵美　『一乗要訣』の研究—源信僧都の一乗思想を中心として

渡邊　純子　アーリヤデーヴァの無常論［第1部・第2部］

山本　真吾　バガヴァッド・ギーターにおける saṃnyāsa

の概念規定

本澤　綱夫　律蔵における経済的行為の研究

柳田　正慈　親鸞における自覚と救済の過程とその成立―『教行信証』における「二河の譬喩」の位置とその一考察

渡辺　法子　天台教学における待絶二妙

東洋学論叢
（東洋大学文学部紀要 第52集）
印度哲学科篇
平成十一年三月三十日 印刷
平成十一年三月三十日 発行 〔非売品〕
発行所 東洋大学文学部
東京都文京区白山五丁目二八番二〇号
電話 印度哲学科（三九四五）七三七七
印刷 日新印刷株式会社
東京都文京区大塚五―二十五―十七
電話 〇三―三九四三―一四一一

BULLETIN OF ORIENTOLOGY

Bulletin of the Faculty of Letters
Toyo University

NO. 52

March, 1999

Series of
INDIAN PHILOSOPHY
XXIV

CONTENTS

Atsushi IBUKI : On the Commentary on the *Laṅkāvatāra-sūtra* Attributed to Bodhidharma (Part Two) ····· (1)

Taigen HASHIMOTO : Popular Religious Thoughts in the Medieval North India and Kabīr ····· (92)

Tadashi SHIMIZU : Rāgadhyānas Described in the *Rāgavibodha* and its Inheritance of Melarāgas from the Precedent Saṅgītaśāstras ····· (136)

Akira SUGANUMA : A Japanese Translation and Notes of the *Siddhāntakaumudī, Kārakaprakaraṇa* (V) —The meanings and Usages of the Third case (*tṛtīyā vibhaktiḥ*) ····· (160)

Published by
TOYO UNIVERSITY
Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo